2020年度

児童養護施設・里親家庭等
進学応援金

事業
報告書

朝日新聞厚生文化事業団

本部（東京）
〒104-8011　東京都中央区築地5−3−2
TEL 03-5540-7446　FAX 03-5565-1643

大阪事務所
〒530-8211　大阪市北区中之島2−3−18
TEL 06-6201-8008　FAX 06-6231-3004

西部事務所
〒812-8511　福岡市博多区博多駅前2−1−1
TEL 092-477-6930　FAX 092-477-6931

名古屋事務所
〒460-8488　名古屋市中区栄1−3−3
TEL 052-221-0307　FAX 052-221-5453

朝日新聞厚生文化事業団

協賛：原田積善会

御　礼

私たちは、この奨学金を受けている学生のみなさんを、「応援生」と呼んでいます。「奨学生」とは、あえて言いません。「奨学金をお届けするだけの関係とは異なる」という思いがあるためです。

さまざまな奨学金がある中で、進学応援金の最大の特徴は、ご寄付によって運営されていることにあります。そこには、社会的養護で育った子どもたちへの、みなさまからのたくさんの応援の気持ちが込められています。

また一方で、私たちは、支援を受ける学生のみなさんには、同じような経験をした仲間を支えたり、親と離れ将来に不安を抱えた子どもたちに安心感を与えるモデルになったりと、社会に働きかけ応援する側になってほしい。そんな思いも込めています。

2021年4月入学の17名の学生が加わり、現在の応援生は、104名となっています（2021年3月卒業生を含む）。一人ひとりの未来が幸せなものであり、また、彼ら彼女らが、豊かな社会を築く一員に加わってくれることを願い、今後も、取り組んでまいります。

本応援金に、ご支援をいただきましたみなさまに、心からお礼を申し上げます。

朝日新聞厚生文化事業団

児童養護施設・里親家庭等「進学応援金」とは

進学応援金は児童養護施設・里親家庭などから大学・短期大学・専門学校に進学する学生を経済的に支援する奨学金事業です。2008年のスタートから約400名に返還不要の奨学金を届けてきました。2020年度からは新たな支えあいの形を作っていく制度として、これまでの奨学金事業を発展させる形で①入学祝金および学生応援金の贈呈②ピアミーティングの実施（年1回程度）③相談窓口「応援ライン」の3つの活動を行います。

進学応援金は、みなさまからのご寄付と山岡こども応援資金などによって行っています。

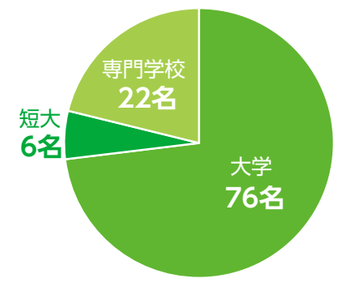
2020年の給付報告

2020年度は新入生17名・在学生58名の計75名に総額3800万円を交付しました*1。応援金は皆様からのご寄付と朝日新聞厚生文化事業団が拠出しています。3月に卒業する26名も含めますと、在籍する学校の種別は大学76名、短期大学6名、専門学校22名です。専攻は「教育・保育」、が最も多く、次いで「福祉」「医療・看護」「工学・理学・工業」が続きます。

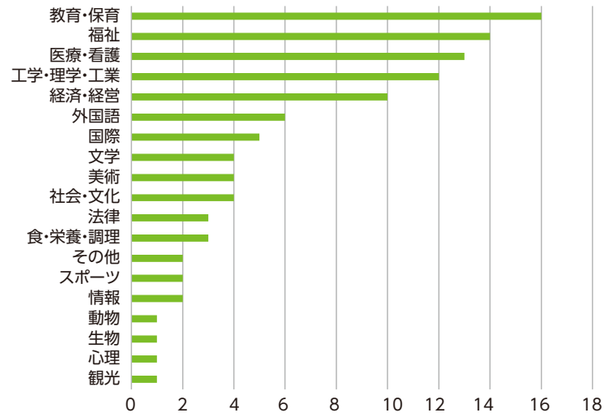
*1　他に連絡のつかない学生が3名おり、規定に基づき、やむを得ず給付を止めています。

進学応援金は毎年春ごろに募集を開始しており、2020年は234名の高校生から応募がありました。応募に際しては申込書・資金計画書・課題シートのほかに、本人を良く知る施設職員や里親からの推薦書を送付していただきます。今年度は19名の高校3年生を内定し、最終的に17名が応援生となりました。

学校種別と人数



専攻内容と人数



人数などは3月末時点。

ご寄付について

当事業を多くの人に知っていただくために朝日新聞A-portを利用したクラウドファンディングでご寄付を募る呼びかけをいたしました。皆様からのあたたかいご支援・ご声援をうけて、本事業への寄付金総額は1788万2270円となりました。ご理解とご協力に感謝し、厚く御礼を申し上げます。内訳は下記の通りです。

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
A-port（クラウドファンディング）	215件	3,469,000円
朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付	76件	14,413,270円
合計	**291件**	**17,882,270円**

進学応援金をうけて大学や専門学校で学ぶ私たちから、寄付者の方々へ

ご寄付と応援メッセージをありがとうございます!!

僕は5歳から児童養護施設で育ちました。施設で生活することは困難なこともありますが、かけがえのない仲間ができるので悪いことばかりではありません。そのことを子ども達に伝えたいし、将来は子どもに寄り添い信頼される児童養護施設の職員になりたいと思っています。そのために大学に進学して児童福祉を学びたいです。

（新入生）

私自身がそうであったように、世の中には虐待をうけていても周りに言えず、ひとりで悩んでいる子どもが多くいます。そんな時、子どもが一番に相談できる、頼りたいと思える教師になることが私の将来の目標です。

（新入生）

大学で福祉を学びながら、知的障害者の通勤寮と認知症高齢者のグループホームで宿直のアルバイトをしています。去年はコロナの影響で実習が中断して、リモートでの学内演習に変更することがありました。大変なこともありますが、皆様のおかげで学べていることに感謝しています。これからも勉学に励んでいきたいです。

（大学3年生）

皆さんがご寄付をしてくださった進学応援金のおかげで進学ができて、自分の夢を叶えることができました。とても感謝しています。社会に出たら、今度は自分が誰かを少しでも支えられるように、努力していきたいです。本当にありがとうございました。

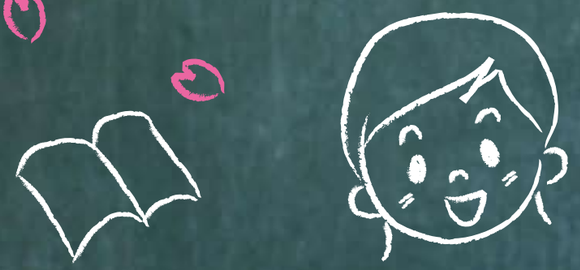
（大学4年生）

私の人生は大人に振り回されることばかりで悔しく思うこともありました。しかし、児童養護施設の職員や子ども達や学校の先生に支えられて、私は1人ではないと実感できるようになってきました。大学では大好きな英語を深く学び、積極的に自分の視野を広げる活動に参加したいです。

（新入生）

進学応援金は私の2年間の学生生活の大きな支えでした。コロナ禍で経済的に苦しい時期もありましたが、学校に通い続けられたのは皆様のおかげです。どうか今後とも、同じような境遇の人たちを支えるご支援をお願いできたらと思います。2年間、ありがとうございました！

（短期大学2年生）



僕は陸上の指導者になることを目指して大学で勉強しています。卒業後は体育教師になるか、大学院に進学してスポーツ心理学やコーチングの勉強をするか将来の進路に悩んでいるところです。自分のやりたい勉強ができ、自分の可能性を広げることができるのは皆さんのおかげです。ありがとうございます。

（大学2年生）

3年までは電気系の幅広い分野を勉強していましたが、来年は4回生になるので研究室に配属されます。研究室でひとつの分野を深く学べるのはワクワクします。ただし、教授からはアルバイトをする時間がなくなると聞いているので、進学応援金で学費を補いつつ、今は週5日アルバイトをして学費や生活資金を貯めています。

（大学3年生）

応援生のためにご寄付をありがとうございます。3年間の学費支援を受けられたおかげで無事に学校を卒業することができました。施設の出身者は経済的な理由から進学を諦めがちです。私も諦めかけていましたが進学応援金のおかげで希望をもらいました。本当にありがとうございました。

（専門学校3年生）

たくさんの応援をありがとうございました。卒業後は念願だった児童養護施設の職員になります。親と暮らせない子どもたちの生活や未来を応援して、いつまでも寄り添える大人になりたいと思います。

（大学4年生）

*学年は、2021年3月末時点

児童養護施設・里親家庭等「進学応援金」

ピア・ミーティング

@オンラインZoom

2021年3月19日、20日、すべての応援生を対象にしたはじめての「ピア・ミーティング on-line」を開催しました。この集いは応援生の有志が1年間かけて企画、運営の準備をしてきたものです。集いの目的は、「2日間、楽しい時間を過ごしながら、同じように社会的養護を経験した学生や後輩のために、自分たちに何ができるかを考えること」と位置付けました。参加した応援生は、のべ約100名。グループに分かれて様々な話し合いが行われ、今後スタートする応援生による「ぴあ活動」※のための大きな一歩となりました。

※「ピア」は、仲間を意味し、応援生と事業団では、応援生が社会的養護の当事者とともに行う様々な社会的取り組みを「ぴあ活動」と呼んでいます。

共通の体験をした仲間がいること

レクリエーションゲームなどで初対面の緊張をほぐした初日に続き、2日目は、「みんなに聞いてみたいこと」と題して、小人数に分かれて交流会を実施しました。社会的養護で暮らした子どもたちは、施設や里親家庭を巣立つと、多くの場合、同じような環境で育った人と出会うことがほとんどありません。にぎやかな子どもたち、大勢の職員との集団生活で育ち、突然に一人になり強い孤独感に悩まされたり、育ちの環境から学校の友人に話せない悩みを抱えていたりすることもあります。また、頼れる親族がいない人がほとんどです。

こうした学生たちに、共通の経験のある“仲間”との交流をとおして、「ひとりじゃない」と感じてもらい、支え合える関係づくりのきっかけにしてもらうことが、このグループワークの目的でした。

新入生からは「一人暮らしで何が大変ですか?」「お金の管理はどうしていますか?」「大学ではサークル活動に参加した方がいいですか?」などの質問があり、上級生が自分の経験を語ったり、具体的にアドバイスしたりするやりとりが見られました。

グループワークの後には、児童養護施設出身で、米国で親との死別や離別を経験した子どものグリーフケアを実践する伊藤ヒロさん(Kids hurt too Hawaii・ディレクター)が講演し、学生にエールを送りました。

「私たちにしかできないことがきっとある」

続いて、応援生による「ぴあ活動」を具体的に話し合うプログラム「ボランティア活動について考える」を実施。グループごとに、90分間、活発な意見交換が行われました。終了後の全体会では、各グループで企画したボランティア活動を全員に向けてプレゼンテーションしました。学習ボランティアやサマーキャンプ、料理教室、環境保護活動、インターネット経由で語り合う“オンラインカフェ”などを通じて、子どもたちと交流し、安心感や将来への希望を与えたいなどと、それぞれに具体的な発表が行われました。施設職員と里親の養育支援のために応援生が体験者として語る機会をつくることが、経験を活かした取り組みになるというスピーチもありました。

発表者の1人は、学習ボランティアなどの活動をとおして、「支援を受けた子どもが、また次の支援者になってほしい」と、支え合いが広がることへの期待も語りました。

ミーティングの振り返り

はじめてなので緊張しましたが参加して良かったと思いました。応援生の先輩方が優しく楽しく接してくださるので、真面目なことも趣味の話もたくさんできました。自分の意見を言うのがあまり得意ではない私も楽しく参加することができました。ミーティング後に集まる場がなかったのが少しさみしかったくらいです!

同じ境遇の人と話したり相談したりできる機会は少ないので参加してよかったです。同じ境遇だからこそわかる部分や、自分と同じ事で悩んでいるひとがいることがわかりました。「ひとりではない」と思えたし、また頑張ろうと思えました。

私は実行委員会のメンバーとして準備段階から関わってきました。「より良いイベントにするにはどうしたらよいか?」と話し合う経験はとても有意義でした。準備する過程で成長できたと思います。応援生たちの育ってきた環境や境遇は似ていますが、考え方や意見は人それぞれです。他の人の意見を聞けるのはとても新鮮だったし、共感できることも多くありました。この企画に携わることができて本当に良かったです。

概要

2021年3月19日(金)15:00-18:00 / 20日(土)9:30-16:15

Zoomによるオンライン開催(新型コロナウイルスの感染防止のために自宅のパソコンやスマートフォンからオンラインで参加し、画面越しに顔をあわせて交流する形式としました。)

主催:ピアミーティング実行委員会(応援生有志)/朝日新聞厚生文化事業団

Interview

相談未満のやりとりから関係をつくる
～相談窓口「応援ライン」の取り組み～

NPO法人「なごやかサポートみらい」　蛯沢光さん

進学応援金を受ける学生が悩みや困りごとを相談できる窓口として「応援ライン」を開設しました。この窓口はスマートフォンアプリを使って気軽に相談することができます。相談に対応するのはNPO法人「なごやかサポートみらい」の蛯沢光さんと水野梨沙さんです。社会的養護のもとで育った経験があり、現在は子どもたちの支援をしている2人が必要に応じて適切な援助につなげます。

2020年夏から相談窓口をスタート

NPO法人なごやかサポートみらい理事長の蛯沢光です。私たちの団体は愛知県名古屋市を中心に、児童養護施設や里親家庭等で暮らす子どもへのサポート活動、施設を退所したあとのアフターケア、社会的養護に関する情報発信などをおこなっています。

朝日新聞厚生文化事業団さんとの関わりは10年以上になります。進学応援金事業の新しい取り組みとしてSNSを使った相談窓口の開設を提案いただいたのが2020年の春頃でした。コロナ禍で人との交流や対面での会話が難しい状況もあり、学生の精神的なサポートをする役割として私たちが対応することになりました。

応援ラインの相談は曜日や時間の制約を設けていません。役所や病院と違って「いつでもどうぞ!」というスタンスでやっています。2020年6月にスタートした当初は20人くらいの学生が登録して、2021年3月時点では57人が登録をしています。寄せられた相談には必ず返事をするようにしていますが「最初はそんなに相談はこないだろうな」とも思っていました。学生たちは人に相談するよりも自分で問題を解決しようとする傾向があります。かつての私もそうでした。私自身も7歳から18歳まで児童養護施設で生活した経験があります。

児童養護施設で育ったからこそ共感できる

私の場合、親の経済的な事情から児童養護施設に預けられました。施設から大学に進学したという点では、進学応援金を受けている学生の先輩のような立場です。1986年生まれの私と今の学生では状況が異なる部分もありますが、社会的養護で育った当事者として、心のうちにある思いや葛藤は共感できる部分があります。

私の大学時代はものすごく忙しい日々でした。学費と生活費を稼ぐためにアルバイトを5つくらい掛け持ちしていたので、親から仕送りをもらっている同級生を批判的に見ていました。働きすぎて大学に行けず、自分のことだけで精一杯で、自分が一番大変だと思いこんでいました。当時の私は相談ラインに連絡しないタイプです。弱音を吐きたくないし「自分でやらなきゃ、自分で頑張らなきゃ」と思い込んで無理を重ねました。

大学2年の時に身体を壊して、どうにもならない状態になって初めて人を頼ることができました。「えびちゃん、協力するからさ!」と言ってくれた人たちが頑なになった心をほぐしてくれました。なんでも自分でやることが自立はなく、人に頼らせてもらいながら主体的に生きることが自立です。それがわかるまで時間がかかりました。

頑張ってきた学生ほど人に頼るのが苦手

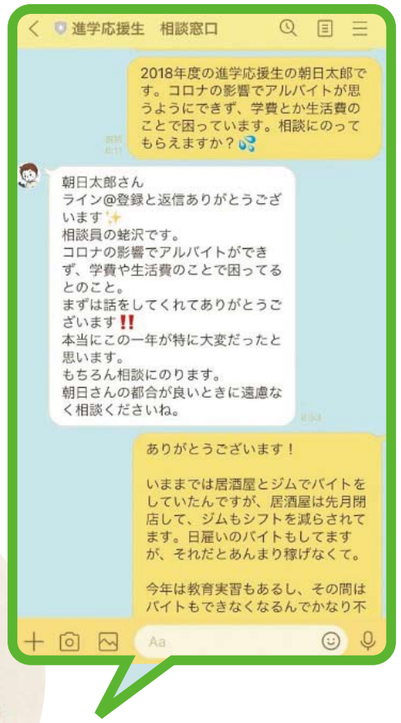
こうした苦い経験があるからこそ、私は相談することの難しさを知っています。この10年くらいの間に奨学金制度などは充実してきましたが、それでも社会的養護から大学に進学するハードルは高いです。頑張ってきた学生だとわかっているので、応援ラインには私から”話のきっかけ”を送り続けています。それは私自身の近況であったり、学生時代の話であったり、2歳半のうちの息子の写真だったりします。結局は”人”なんです。「困ったことがあったら相談してね」と待つよりも、自分のことを伝える方が学生からの反応があります。

たわいもないやりとりから「学校でしんどいことがあった」とか「人間関係で悩んでる」など、相談未満のやりとりもたくさんあります。何気ないコミュニケーションの必要性を事業団の人たちも理解してくれています。学費や生活費などの金銭的な問題について踏み込んだやりとりが必要な場合には、ZOOMを使ってオンライン面談に対応することもありました。内容によっては女性の相談員に対応してもらうこともあります。

頑張っている学生ほど人に頼ることができず、自分で抱えすぎて崩れてしまいがちです。身の回りに頼れる人がいるならそれでいいのですが、お世話になった施設職員や里親の親心がプレッシャーになることもあります。「もうやめたい」と思うこともあるでしょう。社会にはいろいろな選択肢があるので、どの選択をするにしても自分事として考えることが大事だと思います。

応援されている実感が力になる

私が「もう限界だから大学をやめたい」と思ったときに、頭に浮かんだのは施設にいたときに出会った職員さんや寄付や応援をしてくれた人たちの顔です。進学応援金も多くの人のご寄付で成り立っています。多くの人が自分を応援してくれていると実感できることは本人の力になります。大事にしてもらった経験があれば、他者を大事にできる大人になれます。自分は施設の人に大事にしてもらい、あたたかく接してもらい、応援してもらってここまできました。今は応援する側になりました。さまざまな苦難を乗り越えてきた学生たちが、自分の未来に向かって進んでいけるように。共に見守り応援をいただければ幸いです。



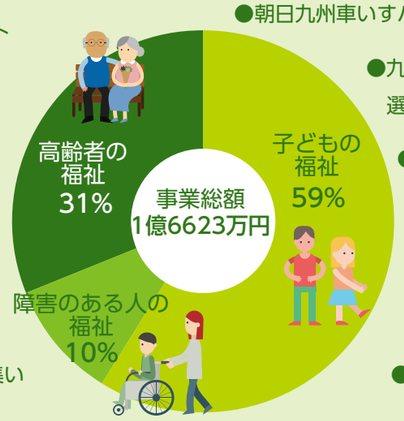
（インタビュー・構成：井上エリコ）

皆さまに支えられ、今年で93周年

朝日新聞厚生文化事業団は1923年（大正12年）の関東大震災の被災者支援をきっかけに創設されました。

「かけがえのない子どもたちへ」「豪雨被害の方へ応援の気持ちを…」
温かいメッセージとともに、昨年はのべ8500人余りの方がご支援くださいました。一人でも多くの方に必要な支援を届けられるよう、下記のように幅広い社会福祉事業を実施しています。これからも、皆さまのお気持ちをしっかりと受け止め、誰もが安心して暮らせる社会のために役立ててまいります。

皆さまからのご寄付は、以下のような事業に使われます



- ●復興支援プロジェクト
- ●南三陸復興支援
- ●グリーフサポート
- ●朝日夏季保育大学
- ●視覚障害の大学生のための聖明・朝日盲大学生奨学金
- ●みんなでパラリンピック
- ●障害者歩くスキーの集い

- ●朝日九州車いすバスケットボール選手権大会
- ●九州車いすツインバスケットボール選手権大会
- ●フォーラム認知症カフェからの出発
- ●認知症カフェ運営講座、セミナー
- ●認知症マフワークショップ
- ●シニア世代の週末特別教室
- ●朝日高齢者福祉セミナー

※2020年度事業予算、東日本大震災救援事業を含みます

- ●高齢者施設訪問プログラム　ゆうゆうビジット
- ●認知症フレンドリーキッズ授業
- ●全国高校生の手話によるスピーチコンテスト

朝日新聞厚生文化事業団の「応援金」事業

児童養護施設・里親家庭の高校生進学応援金

児童養護施設で育ち大学等で学ぶ学生を対象とする応援金。2008年から現在までに約400名を応援。

自立援助ホーム・シェルターまなび応援金

虐待などを受けた子どもと若者を対象とする応援金。高校等への就学や資格取得を支援。2020年5月新設。

東日本大震災こども応援金

震災によって両親を亡くした子どもを対象とする応援金。年齢に応じて150～300万円を給付。現在までに約200名を応援。

新型コロナウイルス緊急学生応援金

社会的養護で育ち大学等で学ぶ1412名の学生に対して、コロナ禍においても学業を継続できるよう応援金と応援メッセージを届けた。

ーご支援・ご声援をありがとうございましたー

2020年度
児童養護施設・里親家庭等 進学応援金 事業報告書

2021年4月27日発行

発行者　社会福祉法人 朝日新聞厚生文化事業団

執筆協力　井上エリコ

デザイン・イラスト　かえるぐみ